

証明 式(5.4.2)が成り立つならば, (M, g) が一定の断面曲率 c をもつことは明らかである. 逆を示す. (M, g) が一定の断面曲率 c をもつとする. このとき, M 上の4次共変テンソル場 \mathcal{R}, Q を各々,

$$\begin{aligned} \mathcal{R}_p(\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4) &:= g_p(R_p(\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2)\mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4), \\ Q_p(\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3, \mathbf{v}_4) &:= c(g_p(\mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3)g_p(\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_4) - g_p(\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_3)g_p(\mathbf{v}_2, \mathbf{v}_4)), \\ &\quad (p \in M, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_4 \in T_p M) \end{aligned}$$

によって定義する. 任意に $p \in M$, および, $(T_p M, g_p)$ の正規直交基底 $(\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_n)$ をとる. このとき仮定により, 任意の $i, j \in \{1, \dots, n\}$ に対し,

$$\mathcal{R}_p(\mathbf{e}_i, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_i) = Q_p(\mathbf{e}_i, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_i)$$

が成り立つ. 一方, 命題5.4.1における関係式が Q に対しても成り立つことが容易に確かめられる. これらの関係式を用いて, 任意の $i, j, k, l \in \{1, \dots, n\}$ に対し,

$$\mathcal{R}_p(\mathbf{e}_i, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_k, \mathbf{e}_l) = Q_p(\mathbf{e}_i, \mathbf{e}_j, \mathbf{e}_k, \mathbf{e}_l)$$

が成り立つことが導かれる. それゆえ, $\mathcal{R}_p = Q_p$ が示される. \square

ここで, 定曲率空間の例を紹介することにする.

例5.4.1. $n (\geq 2)$ 次元擬ユークリッド空間 $\mathbb{E}_\nu^n := (\mathbb{A}^n, g_\nu^\circ)$ は完備かつ単連結で, 平坦な空間である. ^概ユークリッド計量 g_ν° は \mathbb{A}^n の座標系 $\text{id}_{\mathbb{R}^n} = (x_1, \dots, x_n)$ を用いて

$$g_\nu^\circ \left(\frac{\partial}{\partial x_i}, \frac{\partial}{\partial x_j} \right) = \begin{cases} -\delta_{ij} & (1 \leq i, j \leq \nu) \\ \delta_{ij} & (\nu+1 \leq i, j \leq n) \end{cases}$$

によって与えられることを注意しておく.

例5.4.2. \mathbb{E}_ν^{n+1} 内の半径 r の $n (\geq 2)$ 次元擬球面

$$S_\nu^n[r] := \left\{ (x_1, \dots, x_{n+1}) \in \mathbb{E}_\nu^{n+1} \mid -\sum_{i=1}^{\nu} x_i^2 + \sum_{i=\nu+1}^{n+1} x_i^2 = r^2 \right\}$$

は C^∞ 級擬リーマン超曲面であり, その第1基本形式を g として, 組